

Otago 大学 Research day に参加して

大学院 2 年 青 木 由香莉
(歯周診断再建学分野)

去る2009年3月26日、ニュージーランド Otago 大学で行われました Research day に口腔生命福祉学科 山崎教授と歯科総合診療部 中島先生と参加してきました。

Otago 大学はニュージーランドの南島の南端近くに位置するダニーデンという町にあります。このダニーデンはこぢんまりとした町ですが、町並みはスコットランド様式の白い石造りで美しく、海の向こう側にはもはや南極しかないところであり、さらには少し町をはずれば「ニュージーランド＝羊」という期待を裏切らない広大な自然が広がり、どこかのテレビでみたような羊の群れに遭遇することができます。Otago 大学が町の中心にあり、その周辺は学生街で、物価も安く治安もよく、非常に生活しやすそうな印象を受けました。

この Research day で、今回私が発表したのは、歯周病原細菌 *Porphyromonas gingivalis* 感染が冠動脈疾患リスクに及ぼす影響を歯周炎モデルマウスを用いて解析した結果です。歯周炎が冠動脈疾患のリスクの一因であるという疫学的報告は過去にいくつかありますが、歯周病原細菌がどのようなメカニズムで動脈硬化症

の発症・進展に関与しているかということをはっきりさせるため、私たちはマウスに *Porphyromonas gingivalis* を感染させて歯周炎モデルマウスを作製しました。このマウスの全身および局所の病態を解析した結果、血管や肝臓での遺伝子発現の変化が認められ、歯周炎が冠動脈疾患リスクを高めるとことがわかりました。現在もこのマウスを用いた研究は、私たち研究班が一丸となって継続して行っています。

では、Research day とはなにか？ ということですが、言ってしまうと新潟大学でいう「新潟歯学会」のようなものです。卒業年次の大学院生が一堂に会して、それぞれの研究を発表し、その中でも優秀な学生には賞が贈られます。またここでは、各国から著名な先生方を招待し講演が行われます。ミネソタから Mark C Herzberg (Journal of Dental Research の Editor-in-chief だった有名な先生です)、メルボルンから Mike Morgan、マレーシアから Rosnah Zain、そして日本から山崎先生が招かれ、非常に貴重な講演を聞くことができました。さらに、この Research day には J M がスポンサーとしてついており、ランチと演題終了時に



Otago 大学前で山崎先生と



発表終了後に Prof. Gregory J Seymour らと

はビュッフェ形式で軽食が用意されているのですが、これが学生や教員が親睦を深めるのに非常によい機会となっていました。私もここに参加させていただいたのですが、コミュニケーションがもっと上手にとれればと何度思ったかわかりません。しかし、不自由な英語ながら、多くの大学院生とそれぞれの大学生活や研究について話すことができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。

大学まして国が異なれば、生活スタイルや習慣、文化は当然ながら異なります。Otago大学の歯学部は学部内および病院内も見学させていただいたのですが、診療スタイルも服装から違い、驚きました。しかし、そこには大学のシステム、学生教育のカリキュラム、診療報酬、国の政策、患者様である国民の理解、等々さまざまな要因が絡んでいます。Otago大学のシステムで素晴らしいと感じたことはたくさんありますが、これがそのまま日本ですぐできることではないですし、逆に日本のよさも海外の大学を見ることで改めて感じることができました。大事なことは、実際に知る、ということだと思います。これは研究においても臨床においてもいえることだと思いますが、今ま

で自分の知らなかったことを、実際に自分の目で見て、聞いて、そして考えることがいかに大切か、そこから多くのことを始めることができるということに改めて学びました。

海外の大学で学んでいる大学院生や先生方と話すことで、多くの方が様々な研究をしていてなんて世界は広いのだ、ということを実感することができます。しかし、研究に携わっていることで逆にとても近く感じることもできるのです。地球の反対側で、同じような研究を同じように頑張っている人がいるということを知るのには、非常に励まされることです。そういった新たな繋がりができたのが今回得られたものの中で最も嬉しいことでした。

毎日の研究や診療を行っているとな目の前の出来事に集中することが多く、それは大事なことです。ときにもっと遠くへ眼を向けることの大切さも今回学ぶことができました。このような機会がなければ知ることができなかつたと思います。大学院生や学部学生の交換留学などの、実際に体験できる機会がより増えることを期待します。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さった諸先生方に心より感謝申し上げます。



英語での発表に緊張しました



各国の先生方との夕食会